

さかいたけおの「母乳育児奮闘記」

さかいたけお赤ちゃんこどもクリニック 塚 武男

第9回 37週の出生で哺乳力不良だった赤ちゃん

Rちゃんは37週4日の普通分娩、Apgar：8/9、第二子の経産婦で分娩には特に問題なかった。

日齢1(37週5日)から初乳は出たが、Rちゃんは眠ってばかりでお母さんのおっぱいに吸い付かない。やむを得ず搾乳を哺乳びんで与えると少しだが飲んでくれる。それで何とか過ごすことにした。

日齢3(38週0日)：血清ビリルビン値18.9mg/dlまで上がり光線療法開始。

日齢5(38週2日)：やはり飲まずに眠ってばかりで活気に乏しいということで、その産科の先生から私のクリニック紹介となる。体重：2582g(−172g：6.2%減)

早速診察すると心・肺に異常はないようで、緊張は良好。模索反射、吸啜反射は良好で、今にも吸い付きそうだが直母させると確かに吸わない。

ここでフロッピーだと「プラダー・ウイリ症候群」なども考えないといけないが、それは否定出来る。

一応「疑われるのは未熟性のみなのもう少し入院させてもらって様子を見てもいいかと思えます」と母親に伝え、産科の先生にその旨の返事を書く。母親にはもう一つ「吸わなくても必ずおっぱいを毎日何回も口に含ませて下さい」と伝える。

産科には日齢10(39週0日)まで入院させてもらい、退院。

直母はまだ出来ないが哺乳びんからは少しずつ飲めているようだ。

日齢11(39週2日)：体重2750g。母親から搾乳してみると80cc搾乳出来た。「凄いねー、いいおっぱいだねー」と伝える。聞けばお姉ちゃんは完母で2歳まであげていたそうだ。直母はまだ出来ないが、毎日乳輪をしっかりとくわえてもらう様に再度話す。その帰り際、母親が「あ、そう言えばこのメモを渡して下さいと産科の先生言われました」と言うのでそのメモを見ると「日齢10、血ビ19.5でした。宜しくお願いします。」とあった。思わず僕は「えーっ」と叫び、慌てて血清ビリルビン値を測ったが17.2mg/dlで一安心。

日齢17(40週1日)：体重3125g。「体重増えたねー」。「4日前からおっぱいを直接飲めるようになりました」。聞けば直母で12-13回よく飲んでくれるようになったという。「やっと目覚めたかな」と僕。血清ビリルビン値：15.5mg/dl。

日齢26(41週2日)：体重3590g、直母10-12回、血清ビリルビン値14.2mg/dl。

「もう大丈夫だと思います」という母親の言葉に従い、遠方だったので当院での診察を終了した。

基本的には37週の未熟性が残っていただけであり、合併症は無かったこと、母親の母乳分泌も良好で、Rちゃんも最初は哺乳びんから飲んでくれた等の好条件が重なったことが余計な補足や介入

をしなくてもよかった背景とも思われる。

■教 訓

1. 低出生体重児、在胎36週以下であれば注意を払うが、37週以降であれば多くの場合は哺乳もうまくいく。ところが中にはこの様に未熟性が残っている場合もあり注意を要する。
2. 未熟性のみが疑われた場合は筋緊張、吸啜反射がしっかりしていれば余計な介入はせずに成長を待つだけでいいと思われる。勿論ここはしっかりした診察が必要である。
3. 在胎37週は38週以降に比べて一過性多呼吸（TTN）、高ビリルビン血症、低血糖などの合併症が多く、こういう面からも正期産に比べて矢張り少し未熟性が残る週数であると認識しておくことが勧められる。